紹　介

田崎　哲郎編『在村蘭学の展開』

洋学史の中核は、西洋科学の移植・研究にあるため、その研究は幕府や藩の先端技術史的視点からの傾向が強く、幕末期については庶民レベルにまで到達してはいなかった。この点に着目した編者田崎氏が在村蘭学（洋学）研究の問題点を提起されてから三十余年がたった。

その間、全国的視野に立って、蘭学の量的・質的な普及過程をとらえるために、史料の実地踏査が行なわれた。まず地元三河を洗い浚いに調べつつ各地へも眼を向け、地域に密着した研究を進めてこられた。重点は各地域の蘭学学習者個人の研究と、残存門人帳の調査・分析に置かれている。しかも在村の蘭方医に関わる断片的史料を通じて、その時代、その地域における学問的・思想的傾向を探る点に注意が払われている。民衆文化史の観点を踏まえたこれらの検証方法は、従来の蘭学塾門人帳による蘭学者の地域的・階級的な分類方法を採った先行業績、原平三「蘭学発達史序説」（『歴史教育』一一巻二号、一九三六年）・片桐一男「蘭学者の地域的・階層的研究」（『法政史学』一三号、一九六〇年）と趣向を異にする。

これまでに、編者は『在村の蘭学』（名著出版、一九八五年）、『地方知識人の形成』（名著出版、一九九〇年）を著わし、愛知大学綜合郷土研究所編『近世の地方文化』（名著出版、一九九一年）などの中で、精力的にその実証成果と課題を披瀝されている。

本書は一九八七年度朝日学術奨励金による『在村蘭学の総合的研究』の成果の一端であるという。以下の七論文が収録されている。

○青木歳幸「在村の蘭学と地域医療の近代化――幕末から明治初年の長野県医界――」
○遠藤正治「飯沼塾とその門人の動向」
○下山純正「美作在村蘭学概論」
○菊池卓「下野における蘭学の系譜」
○蒲原宏「新潟県における洋学の系譜」
○田崎哲郎「明治前期地方医師の概況――明治十二年愛知県碧海郡『医師人名簿』について――」
○平野満「蘭馨堂門人・鳥海松亭」

扱う地域が信濃・美濃・美作・下野・越後・佐渡・三河・庄内・江戸と充実・拡大した点は、本書の名称どおり展開を意味している。その殆どの論文は特定の地域（地元）に着目して、その地方出身者を各門人帳・姓名録などから拾い出し、その経歴・業績を洗うといった手法の上に立っている。

青木論文は明治初年の医師開業履歴書を手掛かりに、幕末の西洋医学の受容と展開の様相を、種痘の伝播と在村医の地域社会での啓蒙的活動と関わらせて検討された。医学館創設、

医師研修会、医師の再教育・養成制度などを挙げて近代医学への連続性を実証した。遠藤論文は近代的博物学の受容や舎密学・写真術の研究などを手掛けた飯沼慾斎の蘭学塾の成立と展開を、二十名まで拾い挙げた門人の動向を探りながら検討された。親戚縁者の比率が高く、在村において蘭学の展開を実証し、末中哲夫氏の提唱する「実学と同族性」へと導いた。下山論文は宇田川・箕作両家に代表される有能な人材を輩出するに至った地域の特性、津山藩医の蘭学浸透度、在村医の活動状況を実証された。菊池論文は下野関係者三十四名（うち二十二名が在村医）を摘出し個別的に検討された。蒲原論文は蘭学塾の学統系譜と実態を再構築し、さらに明治初期の県内洋学の系譜を検討された。しかし蘭学の受容はあっても展開してゆく場がなかったのが実情という。田崎論文は『医師人名簿』の翻刻と解題である。明治前期における地域医界の公的な位置は、質量共に洋方系医家や旧藩医層が占めていたことを実証された。平野論文は蘭方医吉田長淑の門人鳥海松亭の研究である。庄内藩医を継がず、学芸・書画の世界に遊ぶ反面、蘭学研究によって万国共通の原理に立つ『音韻啓蒙』を著訳した人物である。仙台藩眼科医大森家との血縁関係を明示し、大森家関係の新史料四点を紹介された。

それぞれの地域に応じた展開が繰り広げられ、在村蘭学の総合的研究に資する所大なるものがある。地域の立地条件、歴史的特性をはじめ、蘭学を支えた私的・公的な社会的条件、経済的条件はさまざまであるため、必ずしも蘭学の均一な普及と適切な浸透がみられるとは限らない。実情を正確に把握・分析し得る史料の発掘・調査が全国的に進んだ暁には、蘭学学統系譜の縦横関係と学際的交流の複雑な構図を視覚化・図式化することが要求される。これは本書の課題を越えたものであり、評者も含めた今後の課題である。

（吉田　厚子）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、一九九二年、A五判、三二五頁、定価五九七四円〕

宮澤正順著『素　問・霊　枢』

師匠から「批判しなければ書評ではない、批判しないなら書くなよ」と釘を刺された。本書はすこぶる示唆的で、かつ発明が多いが、あえて特徴と問題点それぞれ二点を挙げて評としたい。

昨年十一月の神農祭の懇親会で、早稲田大学の楠山教授は次のような話をされた。「中国哲学では、『素問』『霊枢』などの医書をあつかうのは異端視されていたが、最近は中国哲学を理解するには医書は欠かせないという風潮になっている。これから積極的に医書を読んでいこうと思う」。臨床家が医学古典を読むには限界がある。いや、あった。思想だけでなく、書誌・文字・訓詁・音韻など、どうしても専門的な知識が必要となる。針灸のさまざまな集まりで、中国学の専門家の話